

学び合いの中で思考力・判断力・表現力を育む音楽学習

1 音楽科で願う豊かな学びの姿

今日の音楽は、東京の神田ばやしを聴いたり映像で観たりしました。ぼくは違うところがいっぱい書けました。かぐらとくらべて違うところは、リズムが違う（神田ばやしの繰り返すたいこのリズムはポコポコポコ）、楽器や楽器の使い方が違う、最初の速さが神田ばやしはおそい、曲らしさがはっきり出ているということです。けれど、同じところもありました。同じところは、笛としめだいこを使っている。どちらもしぶいです。ぼくは島根のかぐらと比べてとてもすごく違うことがわかって良かったです。（小学3年 児童A）

ヨーデルと日本民謡の声は、これまでも聴いたことがありましたが、ホーミーは初めてでびっくりしました。それぞれの歌声には特徴があって、違いはわかりましたが、それぞれの特徴を言葉で表すのは難しかったです。けれど、言葉で表すことでよりそのイメージがはっきりするとも思いました。また、自分の感じ方と他の人の感じ方が違っていておもしろかったし、それをグループで言い合っていると少しずつそんな風にも聴こえたりしておもしろかったです。（中学3年 生徒A）

上記の文章は、児童Aは小学3年「おはやしの音楽の特徴を感じ取ろう」の学習後に、生徒Aは中学3年「日本や諸外国の伝統音楽が生み出す声の音色の特徴を感じ取ろう」の学習後に書いたものである。児童Aは、おはやしを表現したり鑑賞したりする学習を通して、おはやしの特徴である「リズム」や「速度」、「繰り返し」のよさやおもしろさに気づき、「違うところがいっぱい書けました」と表現している。この題材を通して、音楽を形づくっている要素の「リズム」「速度」を聴き取り、それらの働きが生み出すおもしろさを感じ取っている姿がうかがえる。生徒Aからは、いろいろなジャンルの歌声を鑑賞する学習を通して、歌声に関心をもち、音楽を形づくっている要素の「音色」について感じ取り、さらに他者の意見を聞きながら自分の感じ方を深めていっている姿がうかがえる。

また、授業の枠を超えて、休み時間などにも音楽を楽しむ姿や音楽に親しむ姿が見られる。例えば、移動教室の際に友だちと一緒に廊下を歌い合わせながら歩く姿や、授業前に友だちが弾くピアノの周りに集まってその演奏を聴いている姿などが見られる。さらに自己の確立とともに自分と音楽のかかわりを発見し、将来的にも楽しんでいこう、音楽にかかわる道に進んでみたいと思う児童・生徒も多く現れている。このような姿は「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」という中学校第2学年及び第3学年の目標（1）が、着実に達成されつつあることを示すものである。

本学校園音楽科では、日々の授業や音楽活動における子どもたちの様子を観察する中で、11年間の学びを考えたとき、「無邪気に音楽を楽しみ、心をわくわくドキドキさせ、あこがれをもって『音楽っていいなあ』『表現するって気持ちいいなあ』と純粋に感じる心と豊かな表現力が育つ」ことを願っている。そこで、音楽科として求める「豊かな学びの姿」を、以下のようにまとめた。

- 音楽活動に進んで取り組もうとする姿
- 表現や鑑賞に必要な知識や技能を身につけようとする姿
- 仲間と一緒に楽しく活動しようとする姿
- よりよい音楽表現のために工夫しようとする姿
- 音楽活動の楽しさや感動を味わおうとする姿
- 音楽を生活の中に取り入れようとする姿

2 昨年までの研究の経緯

(1) 子どもをとらえるという視点での取り組みからわかったこと

時間ごとのふり返りや自分の表現を聴く場とお互いの表現を聴き合う場を設定したり、教師によるとらえを子どもたちに積極的に伝えたりした。録音した歌声や表現を聴かせるなど、子ども自身がハーモニーや声の響きなどを客観的に見つめていく営みを充実させることにより、「正しい音程で歌えた」「ハモることができた」などの子どもたち自身での気づきが増した。そして、その瞬間に感じた子どもたちの気持ちが次の学びの豊かさにつながっていった。

(2) 音楽科における思考力・判断力・表現力

新学習指導要領の内容を読み取り、キーワード等を領域（歌唱・器楽・創作（音楽づくり）・鑑賞）ごとの表にまとめていく作業を行う中で、思考力・判断力・表現力を次のようにとらえた。

◎思考力・・・イメージする力・理解する力

「音（音楽）を聴いてイメージをふくらませる」「楽譜を見て理解する」など

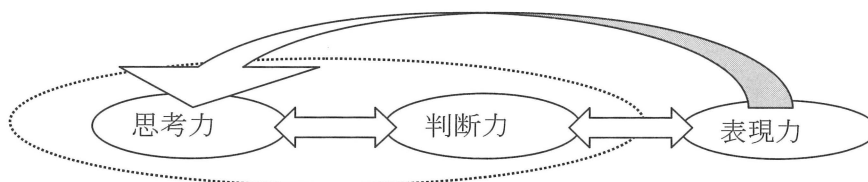
◎判断力・・・選ぶ力・工夫する力・感受する力

「音素材や音楽を形づくっている要素を選ぶ」「表現を工夫する」など

◎表現力・・・生かす力・表現する力

「音楽を形づくっている要素を生かす」「思いや意図を演奏や言葉で表現する」など

「思考力」とは、一般的に論理的思考力（物事を論理的に考える力）をとらえられることが多いが、創造的思考力もある。創造的思考力とは、一般的に流暢性（考えをすらすらとよどみなく作り出す）、柔軟性（いろいろな角度から柔軟に考える）、独創性（新たな考えを生み出す）を中心として、応用性、構想性、感性性を兼ね備えた「考える力」のことであり、まさに発想力・想像力（イメージ力）に通じ、音楽科でいう「思考力」とは創造的思考力の関与するところが大きいととらえた。「判断力」は、イメージしたものを表現へとつなぐ役割を果たしており、イメージしたものを表現するために、どの音素材や音楽を形づくっている要素を用いるかを選び、工夫する力である。また、ある音や音楽を聴き、イメージをふくらませる（思考する）中で瞬時に自分なりにその音や音楽を感受する（判断する）ことが多々ある。このように思考と判断は分かれることなくひとまとまりでくることができるととらえた。「表現力」は、技能的側面を用いながら判断した音素材や音楽を形づくっている要素を生かし、思いや意図、イメージを表出していく力である。思考力・判断力・表現力のサイクルは、「思考力」から「表現力」への一方通行ではなく、それぞれの間を行き来しながらより高い段階へと発展していくものととらえた。



また、一貫教育という視点から、それぞれの発達段階での思考力・判断力・表現力を次のようにとらえた。

発達段階	音楽学習における「音楽的な思考力・判断力・表現力」
初等部前期	音楽を感覚的にとらえ、音楽やその演奏の楽しさを感じながら表現する力
初等部後期	思いや意図をもって、曲想にふさわしい表現を考えたり、自分や友だちの考えを生かしたりしながら表現する力
中 等 部	自分の表現意図を曲想とかかわらせ、知識〔共通事項〕・技能を活用して表現する力

初等部前期での思考力・判断力は、感覚的に音楽をとらえる力が主であり、これがその後の学びの姿のベースになっていく大切な部分である。そして初等部後期では思いや意図を明確にもたせるようにし、自分と他者の考えや表現を比較させながらより思考を高い段階へと発展させていく。さらに中等部にな

ると自分の表現意図を曲想とかかわらせ、これまでに学んだ知識や身につけた表現の技能を活用して言葉や演奏で表現させていく。このように初等部前期から中等部までの発達段階における思考・判断の違いやつながりを意識すると共に、一貫教育における積み上げを大切に学習活動を展開していくことが重要であると考えた。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に有効であった学び合い

昨年度は、思考力・判断力・表現力を育て高めていくための具体的な方策として、学級全体での学び合いを活性化させる授業の展開を模索し、次の①～③について重点的に取り組んだ。

①興味・関心をひきつける教材選択と提示の工夫

同じ年齢の子どもたちでも個々の音楽体験や経験はさまざまである。そのような音楽的体験や経験の差がある子どもたちに対して、学級全体での学び合いが、個人の音楽経験に過度に左右されることのないよう、できるだけ全員の興味・関心をひきつけるような教材選択や提示の工夫を行った。

②共通の課題設定

共通のイメージや言葉を提示したり、共通の音楽を形づくっている要素を設定したりして、子どもたちが何をどのように学習を進めていけばよいのかを明確にして行った。

③学級全体での学び合いの場面の設定

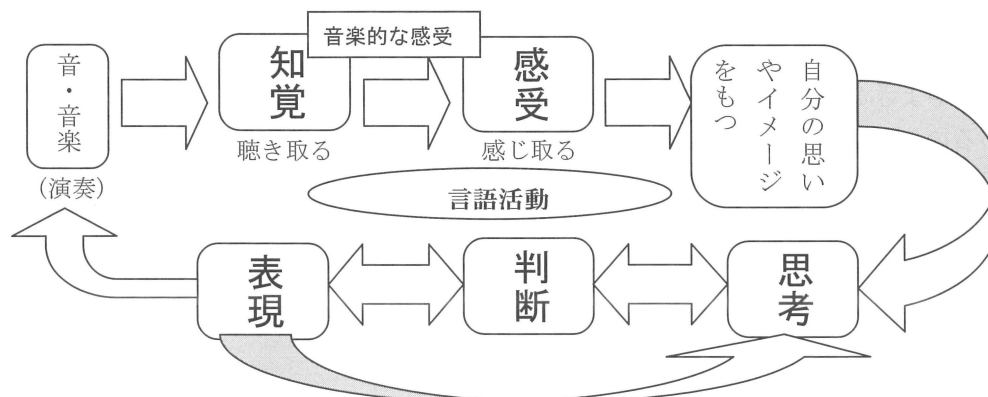
個やペア、グループで取り組んだ内容や成果を学級全体に発表させ、それぞれが感じたことや表現したいことなどを伝え合ったり、よさを認め合ったりするという場を設定した。その際、「グループ」→「全体」で終わらず、「グループ」→「全体」からさらに「グループ」というように「行きつ戻りつ」させることが大切であると考え、この「行きつ戻りつ」の繰り返しを「往還」とよび、重視した。また、個・ペア・グループ・全体の組み合わせは、子どもたちの実態（発達段階、意欲、音楽の体験度など）や学習のねらいなどによって変えていった。

また、新しい学習指導要領では「言語活動の充実」が標榜されている。前述の児童A・生徒Aのふりかえりのように音楽を聴き、楽曲の特徴や演奏のよさなど、思考・判断したことを言葉で表すことによって、自らの学びを確かめることができた。さらに、学習集団を構成する仲間に対して伝え合うことで、学びの質を互いに高め合うことにつながっていった。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力を高めるための授業づくり

音楽の授業において、感性を高め、思考・判断し、表現する学習プロセスは、音楽的な感受をもとによりよい音楽表現を求めて思考・判断・表現を繰り返すことでより高い段階へと発展していく。この学習プロセスのスタートは、子どもの主体的な聴き取りから始まっており、どう学習課題に合わせることが課題となる。また、学び合いの場面では、教師が子どもをとらえ適切にはたらきかけることが大切である。



①学級全体で学び合うための課題設定

子どもたちが〔共通事項〕の学習を支えとしながら、より豊かに音楽表現をしたり鑑賞を深めたりす

ることのできる、まとまりのある題材構成へと工夫改善することが大切である。題材を構成する指導内容は、歌唱＋〔共通事項〕のようなタイプ、器楽＋音楽づくり（創作）＋〔共通事項〕のようなタイプ、歌唱＋鑑賞＋〔共通事項〕のようなタイプがあり、様々なタイプの題材について11年間の発達段階を考慮した年間指導計画を作成していく。そして、「確実に学習する内容は何か」ということを明らかにした題材構成を図っていききたい。題材配列表には、〔共通事項〕欄を設け、各題材で扱う〔共通事項〕が一目で分かるようにした。

また、表現や鑑賞の音楽活動の中で、子どもの主体的な聴き取りから子どもたち自身が課題に気づき、音楽的な感受をもとに、全員で1つの音楽をつくっていく活動を多く設定し、よりよい音楽表現へと工夫することで思考・判断する力を育成したいと考える。そして、「聴きたい」「歌いたい」「自分はこうしたい」と意欲を高めさせていきたい。そのために、楽曲の特徴やよさなど、思考・判断したことを言葉で表し、言葉を媒体として伝え合うことで、学びの質を互いに高め合うことのできる課題や場面を積極的に設けたい。学びの質の高まりに比例して、言葉による表現も豊かになってくることが期待される。そして、さらにふみこんで、言葉では表現できない音楽的な何かについて、思考・判断し、音楽の表現に結実していけるような手立てを工夫したい。

②学び合いの場面での教師のはたらきかけ

思考力・判断力・表現力を育成するための学び合いの場面では、互いの感じたことや思ったことを比較させたり、関連させたりするための発問の工夫や受け止めが大切である。音や音楽の感じ方は人それぞれであり、それを言葉で表現した場合、まったく異なる表現であったり、微妙なニュアンスの違いがあったりする。教師は、それを評価するのではなく認めることにより、子どもたちの中には「そんな感じ方もあるのか」「そう言われたらそのようにも感じる」などの深まりが生まれてくる。また、学級全体での学び合いを深めていくために、子ども対教師のやりとりに終わらず、子どもたち同士の言葉をつなげていくような教師の言葉かけも必要であると考えられる。

(2) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力の評価は、「音楽表現の創意工夫」の観点の評価規準によって行う。子どもの観察や発言、ワークシートの記述や歌声などによって子どもの変容をとらえる。1時間の学習の中で「よく歌うようになった」「強弱をつけて演奏できた」などの変容をみることはある。しかし、思考力・判断力・表現力は、すぐに育成されるわけではなく、ある程度のスパンでみていく必要がある。そこで、単元を通して思考力・判断力・表現力の高まりを評価していきたい。具体的には、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取れているか、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように表すかについて自分の考えや思い、意図をもっているかなどをとらえていきたい。また、録音や録画による「学びの変容」のとらえが、教師や子どもの自己評価に有効に働くと考えられる。

4 成果と課題

楽曲の特徴やよさなど、思考・判断したことを言葉で表し、言葉を媒体として伝え合う活動は、学びの質を高めるのに効果的である。しかし、ややもすると話し合いが中心となってしまう、思考・判断したことを音楽表現に結びつける時間がなくなってしまう。そのような場面と学び合いの場面をバランスよく取り入れていくことが大切である。また、ワークシートの記述による評価では、文章による記述だけにとどまらず、発達段階に即した記述（例えば、図や記号）の方法をさらに追求していきたい。

（文責 小村 聡）

【参考文献等】

大熊信彦(2010)「音楽科の移行期最終年度の実践課題とその対応」『初等教育資料』

大熊信彦(2011)「音楽教育における学力をどうとらえるか」『中等教育資料』

津田正之(2010)「音楽科における指導要録改善のポイント」『初等教育資料』

伊野義博(2010)「思考・判断し、表現する一連のプロセスの実際と展望」『中等教育資料』